

Triumph onedollar ～勝
利への放浪者～

リューヤ

シーバルー大陸。

世界で2番目に大きな大陸と称されているが、人口は世界で2番目に少ないとも言われている。大陸の80%が岩と砂に囲まれた熱地帯で最大気温は50℃を観測、逆に残りの20%は雪と氷の世界が広がり、過去観測最低気温-46度を示したことがある。様々な矛盾が数多く存在している一方で、ラプチナには存在していない独自の文明「科学」が発展している。詳しい詳細については未だ不明瞭なところは多いが、大雑把に言えば「人の手を借りず自ら動く物体」のことを示しているらしい。

治安は世界トップクラスで最悪であり、ほぼ全ての店には必ず賞金首の指名手配所が貼ってあることが常識は程無法者の連中で包まれている。

国を治めているのは「王都」ではなく、「軍隊」と呼ばれる組織だ。これは1か所に存在しているのではなく、それぞれが分割された地区を担当してその土地を統括するシステムをとっているのだが、その軍隊はお互いを敵視し合う傾向が強く見られている。性格が悪く、時々相手の陣地を奪い取るために戦争を起こすことが歴史上何度も繰り返されてきている。そしてその度に、関係の無い一般市民の命が無情なほど奪われてしまうのだとか・・・。

今のところこのシーバルーの中で最も大きな組織、つまりこの国の首都は「フェイファー・ツェザリカ軍」という大陸の中央西部に拠点を置く軍隊である。

「・・・とまあ、こんなところだね」

船から降りた際に貰って置いたこの国の観光用ガイドパンフレットをパタンと閉じ、あらかた読み上げたドクターがテーブルの上へ抛り捨てると、全員が明らかに顔をしかめた。

ここはシーバルーに3か所しかない潤った港町「マテバ」。ラプチナから往復船ピースメーカーに乗ってこのシーバルーへやってきた一行は、現在軽食屋にて飯の真っ最中だった。

「で・・・今はこうして呑気に飯を食ってるけど、実際問題としてこれから具体的にどうするさ？」

全員が注文した中で一番値段の高かった照り焼きチキン定食の肉をクチャクチャと行儀悪く音を立てながら食い、アゲートが虎眼へ向かい尋ねた。対して、頼んだ豚カツセットをすでに食い終えた虎眼は茶を飲み干し、息をついた。

「俺が一人で放浪していた時は、歩いてこの大陸を渡りきった。しかし砂漠どころか、旅そのものにまだ慣れていないお前らのことを踏まえるとだ・・・俺個人としては不満だがこのシーバルーにおける移動には「車」が必要になる。目先の目的はまず車を手に入れることだ」

眉間に若干しわを寄せながら虎眼はそう話した。砂漠を越える時の恐ろしさは自分がよく知っているからこそ出てくる発言である。

・・・だってのに。田舎育ちの4人組は何の事を話しているのやらサッパリで、目が点になり頭上に？が浮かんで虎眼を凝視している。

「虎眼よう・・・もっとわかりやすく説明してくれ」

「その車ってそもそも何だ？」

「・・・・・・・・・・はあ。要するに馬を用いらない馬車みたいなものだ」

「フ～ン・・・それもその科学とやらの力なのかい？」

「そういう事だ」

「なるほど・・・学んでおいて損は無さそうだね、キシキシ」

全員がようやく納得してくれたところで、食事が終了した。今日の目的はひとまずその車の確保から始まるのだった。

金を払って店のドアを開けると、キラキラと照りつける太陽が5人を真上から照らし上げ肌を焼こうとする。この日の気温は現在で29℃、まだ9時にもなっていないこの時間帯でこの気温なのだから日の高くなる昼には一体何℃になっているのやら予想もできない。日照りがう腰でも弱いうちに行動に出た方がよさそう籐虎眼の提案の元、一行は早速車を求めて町の中を歩き回った。

。

「さっそく何だかよう虎眼、車ってどこで手に入る物なんだ？」

「基本的に専門店で取り扱われている。古い中古品なら相場が大体30～50万、整備の整った高級車なら軽く10倍の値が付けられる」

「ううえ、高っけー！」

思っていたよりも車というのは高価な代物であることに一同は驚かされた。しかし今手元にはまだラプチナでせしめた金がタツプリ残っている、決して買えない金額ではないはずだから問題は無いがその高い値段にジンは気に入らなかった。

「ボったくってるってことは無いのか？」

「心配いらん、値段に見合った装備を搭載している。価値に異議は無いはずだ。」

「だといいいけどさあ」

車を取り扱っている専門店を探しながら談笑していると、周囲から異様な空気が漂い始めてきたことにドクターが気付いた。チラチラ確認をとると、まるで自分達を避けるようにみんな明らかに離れて歩いている。時折視線が合いそうになると目を反らしてそそくさと立ち去ってしまう者も多い。ここに来てから名前が売れてしまうほど暴れた覚えは無いのだが・・・この不思議な感覚に釈然としない。ドクターはあえて気付いていないフリをして話さない方が良いと判断したが、その10年に一回あるか無いか微妙なくらい珍しい善意は、目の前から歩いてくる連中によって無情にも砕かれてしまった。

目の前から不審な男が3人横一列になって歩いて来た。全員そろって土色の服にヘルメットをかぶり、肩には見たことの無い細長く黒い鉄の筒をぶら下げている。3人は真正面からジン達を睨めつけながら近づき、手前数mまでお互いが接近し合ったところで動きが止まった。5人の談笑もストップし、5対3で真正面からメンチを切り合う構図の出来上がりだ。

「・・・通れねえだろ、どけよ」

真っ先に啖呵を切ったのはやはりジンだった。普段より目を細め、ワザとらしい喧嘩腰を見せて相手をビビらせるいつもの手法だが、意外だったのはこの後帰ってくる野郎共の反応と次のセリフだ。

「盗賊団「シグ」のリーダー、ザウウェルだな。貴様及びその仲間4人、全員この場で逮捕する！」

「・・・は？」

何を言っているのやら訳が解らず、自然と全員顔に一本ずつしわが作られた。強盗団とは一体何の事なのか説明を聞こうとしたのもつかの間、口を開くよりも先にガチャリと何か聞き慣れた音が耳に届くのと同時に手首が一瞬冷たくなった。見てみればその正体はジンにとって最も忌々しい鎖の手錠であった。

「はあ！？ テメエ一体何の真似だコイツは！」

「貴様らには抵抗も弁護もする権利が無い、大人しく我が軍に出頭してもらおうぞ！ 貴様らにはすでに極刑判決が下されている、本部に到着し次第貴様らには死んでもらう義務が自動発生している。それまでは大人しくしてもらおうぞ！！」

コイツらは全く人の話など耳に届いてなどいない様子だった。今さらになってこれが人違いによる不当逮捕であることに気付くより先に連中は順番で全員に手錠を掛けて行った。ただでさえこのシーバルーの地面に足を付けてまだ2時間もたっていないと言うのに、いきなりこの扱いにはさすがに遺憾を感じる。

「ちょっと待って欲しいさ！！ オレっち達はそのなんとかって強盗団とは違うさ！！」

「口答えをするな！！」

「話してもらいたいねえ、確認もとらない不当逮捕であることに後で気付かされたらきっと怒られるどころの騒ぎではないだろう？」

「貴様らの言葉を聞く耳など我々は持ち合わせてなどいない、黙って歩け！！」

「人の杖に触んじゃねえ！！ つうか手錠が痛てえだろうがコラ！」

「やかましいと言ってるのが聞こえんのか貴様！！」

ドカン！！ 大切な杖を不正に押収されジェットが怒った矢先、一人がついに暴力に乗りだしてきた。自由を奪われたジェットの無防備な腹に男の拳が叩きこまれ、ジェットは目を剥いてうずくまってしまう。食事の後の一撃だ、これは応える様でジェットは痛みと同時に異様な吐き気に襲われて動くことが出来なくなった。

何でこんな目に合わなければならないのか、何でいきなりこうできされなければならないのか、何で話も聞いてくれる素振りも見せないのか、何でオレ達はこんな所で拘束されなければならないのか・・・もう訳が解らないなんて問題じゃなくなっている。

ジェットが殴られてジンがブチ切れる前に、もっと早くブチ切れた男がいた。それは・・・虎眼だ。

虎眼は火花が出そうになるまで歯をギリギリと食いしばると、怒りに身を任せて自らの手首にハメられた手錠を左右へ引っ張り、いとも容易く手錠の鎖を引き千切ってしまった。出来ることならジンもそうしたいところだったが、生憎ジンにはまだ素手で鎖を千切るような筋力は持ち合わせていない。ここはあのバーサク状態になった虎眼に任せた方が得策だと瞬時に判断し、いったん頭に上った血液を下ろすことに専念することにした。

虎眼はすかさず一番手前にいた男、ジェットを殴った方の男に照準を合わせ力任せに顔面へ拳を叩きこんだ。男の顔面は容易に変形し、奥歯を数本空中に放りだしながら吹っ飛び壁に背中から突撃して失神した。

「ッ！！き、貴様！！大人しく白と言うが聞こえんのか！！？」

「やかましいのは貴様らの方だダアホ共がああああ！！！！！」

獣の方向の様な声で相手を威嚇しつつ、虎眼は目の前の男へ向かい走り出した。標的にされた男は舌打ちをし、仕方なさそうに肩にかけていた筒の先端を虎眼へ向けた。虎眼の視線と筒の先端が目を合わせた直後、筒が火を噴き弾丸を発射した。一発や二発なんかではない、あの筒の中には一体何発の弾が入っているのか知らないが数え消えないくらいの数とスピードで際限なく弾丸が発射されている。無限に火を吹く子の筒の音も物凄いようで、至近距離にいたアゲートは必死で耳を塞ぐので精いっぱいだった。

この武器も凄まじいことに間違いは無いが、もっと凄まじいのは虎眼の方である。正面から常識を破って降ってくる雨粒を、全て紙一重で左右に身体をブラし回避しながら接近してきているのだ。

自分の間合いに入ったとたん、虎眼は跳躍し空中で一回転すると、経験が物を語る脳内電卓が計算し尽くしたタイミングで男の肩の上に両足で着地して見せた。唐突過ぎる、という表現を通り越してなにが起こったのかすら理解できないまま棒立ち状態になって慌てふためいた直後、両の踵が男の首と顎を左右からはさむように締めつけてきた。そして虎眼は膝を折って力をためると、一気に重心を後ろへ移動さ背中から地面へ倒れるように自らを落下させた。当然首を抑えつけられた男の方も例外ではなく、重心の移動に伴い身体が前のめりに倒れてしまう。このまま倒れたら顔面強打で済む話だが、虎眼がそれを許さなかった。

地面に背中が付くより先に虎眼は両手を地面に置き、体を支えつつ下っ腹に気合いを入れて、あろうことか男を足で挟んだまま見事な倒立をして見せた。そして今度は男を力任せに振り落とし、顔面強打を上回る顔面陥没の刑に陥れてしまった。これは虎眼が滅多なことでは見せてくれない我流の見技、名は「鳳凰崩し」と呼んでいる。

という訳で、物の30秒射二に二人の男が虎眼一人の活躍によって撃沈してしまったのだが・・・虎眼はまだ腹の虫が治まらない様であり残されたもう一人をかなり険しい表情で睨んでいる。リーダー格らしい男はこれに恐怖し、背中を向けて逃げ出してしまったが一瞬で追い付き、背中を肘一撃で砕いてやった。これでようやく全ての作業が終了だ。

「・・・全く、失礼にも程がある」

「キシキシ・・・君が言えたセリフかい？」

遠くで聞こえるドクターのセリフを無視し、手錠の鍵を奪い取ると急いで全員の手錠を外した。ドクターに至って晴れを言うより先にいの一番でジェットの容体を確認するために走った。口元から少し胃液が流れているが、どうやらリバーズは免れているようで少しホッとしている。ジンはその光景を背後から見守り、ドクターが一応医者 of 自覚を持っていることを改めて再確認して安堵した。

「いや～さすが兄貴さ！久しぶりに技が決まってオレっちなんかスッキリしたっさ！」

「フン、なんてことは無い・・・それよりジェットの方はどうなんだ？」

「安心したまえ、傷跡も残らないような簡単な打撲さ。シップ貼っときゃじき治る・・・大丈夫だろ男女君？」

「ああ・・・余裕、ゲホゲホ！」

「無理だきゃすんじゃねえぞ。それよか一体この仕打ちはどういう事なんだ？」

暴れるだけ暴れ回らせて置いて、ようやく事の本台へコマを進めることができるようになった。懐かしい鎖に占められる感覚を懐かしく思っている暇は無い、今はどうして一行が手錠をはめられる様なことになったのかその真相を知ることが急務だ。車は一旦後回し決定。

「確かに妙だね、ラプチナで暴れたことを問い沙汰されるのならまだ解るが、ここに来てから小生たちはまだ何も壊していない」

「壊したりした事実は認める訳さね？」

「そんな事簡単だ。コイツに聞けばいい」

頭を抱える一行の足元に、さっきのリーダー格の男が放り出されてきた。背中が折れて立つこともままならない様子でもがいている。もちろんコイツを持ってきたのは虎眼で、鼻から話を聞くためにこいつだけを気絶させないでおいたらしいのだ。力の加減もしっかりできているとは、流石である。

早速ジンがそいつの腹に片足を置き、男の悲鳴に耳をかさず自分のペースに沿って尋問がスタートした。

「さてと・・・いろいろ話してもらいたいことが多いが、まず何でオレ達にこんなワッパかけるような真似してくれたんだ？」

ジンは外された手錠を男の視線の高さに合わせて地面に落とし問いた。しかし男もかなり強情で一向に打ちを開こうとしない、そういうよりさっきから目も合わせてくれもしない。仕方なく片足にかかる体重を3倍まで増量させると、男は悲鳴を上げあっさり口を開いてくれた。

「痛たたたたたた！！わかった、言う！言うからどいてくれ！！」

あんまりにも呆気なさ過ぎて詰まんなかったが、せっかく言ってくれるのだからコイツの善意を評してジンは片足を大人しくどけてやった。

息をゆっくり整えながら男が真っ先に口に出したのは、確認だった。

「ヒュウ、ヒュウ、ヒュウ・・・一つだけ確かめたい。君達は『シグ』ではないのか？」

直後、男の目の前2cmでジンの剣が地面に突き刺さった。冷たそうな刃が目の前に突然落ちてきたのだ、一声も上げずに驚かない奴なんかいないに決まっている。

か細い悲鳴を漏らしそっと真上を覗くと殺気を漲らせたジンが目の色を変えて剣を握っていた。

「違うからこんなことしてんだろうが・・・言うておくが俺達はずいさっきこのシーバルーに着いたばかりの、ラプチナ国籍の人間だ」

ジンも虎眼と同様、かなりイラついてきている様子だ。額に血管を浮き出させ、今にもはち切れてしまいそうなほどに引きつっている。

「ヒィ！！す、すまなかった、我々の間違いだったんだ！！謝罪するからこれ以上は許してくれ！！」

「すまんで済めばこの世に法律なんか無いんだよ！！！」

今の一言で完全にキレてしまった二人がとうとう男に対しリンチを決行してしまった。地面に転がっているたった一人の、しかも身動きもとれない男を二人がかりで踏んで蹴って殴ってドツキ回した。後方に離れた残りのメンバーは、二人の行動を阻止するだけの勇気を今の所持ち合わせてはいないので二人の木が治まるまで静かに静観することしかできなかった。気の毒な話だ。

「ドクター、あいつらって実はSなのか？」

「小生の知ったこっちゃないよ・・・キシキシキシシ」

あれから数分後、二人が落ち着いてきた頃にはリンチにされた男は涙を流しながら気絶してしまっていた（過去形なのが重要）。それでもまだ腹の虫が治まらない二人はさっきから眉間にしわが寄りっぱなしで立っている。

「ったく、到着早々いい迷惑だ」

「まったくだ・・・ところでジン、コイツを見せろ」

タバコをくわえて人つけようとしたところ、いつの間にか男の懐をまさぐっていた虎眼が何かを見つけた。四つ折りにたたまれた数枚の紙きれの形で、ご丁寧にピンを打ってバラバラにならないようにまとめてあるようだ。受け取って早速それを広げてみると、衝撃的な内容に口からまだ火の点いていないタバコがこぼれ落ち、同時に色んなことを理解した。

「・・・な～る、そういう事かよ」

「ジ～ン、何が書いてあったのさ？」

事の収まりを確認した3人が今さらになってようやく帰ってきた。ジンは3人に今見た紙切れをまた折ってジェットへ投げ渡した。空中キャッチで紙きれの束を受け取ると、3人は横に並んでその紙切れに目を通した。

その髪束は全て犯罪者の手配書で、中央には5人の顔写真と名前、そしてその首に掛けられた賞金が記載されている。3人は手配書の写真を見た途端、見玉を飛び出させて驚愕した。

一番上に重ねられた手配書の写真に映し出されているのは、何でか知らないがそれはまさしくジンの顔だった。しかしこの写真の男は本物のジンよりちょっと顔つきが厳つい上に悪そうな表情をしている。名前の欄には「ザウウェル」、賞金額は400万L。他の手配書もめくってみると他の4人もジンと同様に非常に顔が似ている連中が写っていた。

ドクターに似ている男が「スナイプ」、懸賞金200万L。ジェットに似ているケバイ化粧をした女が「ショット」、懸賞金220万L。アゲートに似た頭にバンダナを巻いた男が「ハンド」、懸賞金310万L。そして最後に虎眼によく似た男が「サブマシン」、懸賞金350万L。要するにこの手配書の犯罪者と間違えられて、ジン達はコイツらに手錠をはめられたという経緯だったようだ。手錠を所持しているのなら、きっとこいつらがこの辺りを統括している警察か、あるいは軍の人間で間違い無いだろう。初めて見たが暑苦しいような服を着て大変そうだ、あまつさえ今も大変な状況になっているが・・・。

「何さコイツら！？オレっち達のパクリ集団さ！！」

「ムウ・・・腹が立つくらい似ているねえ。それにしても小生の金額が一番安いのが気に食わないねエ・・・」

アゲートの遺憾はともかく、ドクターは自分が犯罪者扱いされた事よりもこのスナイプという男の金額が一番低いことに憤りを感じているようだった。

ジェットは怒りにまかせて手配書をグシャグシャに丸めると手の平の上で一瞬で灰にした。

「フザケやがってこのクソ野郎共が……。おいジン、どうするんだこいつら!？」

イラついているのはジンだって一緒だ。このままこの連中を野放しにしているでは自分達の旅に明らかな支障がきたす。町に足を踏み入れるたびにワッパを掛けられるようじゃあ叶わない。どっかのバカが後ろから攻撃してくるようじゃあ手にも負えなくなる。速攻でブチのめして即刻警察に引き渡した方が良さそうだ。

「とっ捕まえてしょっ引くしかねえわな……」

「話は決まったね。しかしメガネ君、まずはどうやってその連中を見打つけ出すかが問題だよ？」

ドクターの言う事も正しかった。とっ捕まえるのはいいがどうやってそのザウウェル共を見つけるのか、そもそもこのシーバルーの事もまともに知らないのだ。搜索するには相当な骨が折れるのは目に見えている。

「蛇の道は何とやら。地元の強盗団についてなら、地元の同業者に聞くのが一番ってな……」

「ああ……。という訳だ!」

虎眼は突然大きな声を出すと、一行のそばを通り過ぎようとしていた男の腕を、そしてジンも離れたところを歩いていた女の肩をそれぞれ掴み上げた。両社は口から心臓が飛び出してしまうほど驚かされ急いで逃げようと駆けだしたが、この二人が相手では問屋は降ろしてくれない。慌てて暴れた拍子に、二人の袖の中から見慣れた財布がこぼれ落ちた。アゲートがそれを拾うと、やはりそれは虎眼とジンの財布だった。

この二人、ジン達の財布を狙ったスリだったようだ。しかしこの二人、財布をスる相手を間違えてしまった。

「ちょっと、そこで話でもいかがかな？」

「逃げようなんて考えたら……。明日から食事が億劫になるぞ？」

二人はかなり危険な笑みを浮かべてドクターの様に顔の影を強調した。捕まった二人はこんなに暑いのに冷や汗をダラダラ流し、泣きながらそれに応じる他なかった。

人目につかない裏路地に、二人は壁を背にする形で座らされている。正面にはジンを中心にした5人が立って二人を見下ろしている。

「悪かったよ・・・ちょっとした、出来心みたいなもんなんだよ・・・」

「そうそう！もう財布も返したんだし、あたしたちもう帰ってもいいでしょ？」

ジンは二人の声には耳を貸すと無く、悠々とタバコに火を付けて煙を吐き出した。

「・・・おめえらのスリに関しちゃどうでもいい。地元民と見込んで話を聞きたいんだよオレ達は・・・コイツらについてだ」

ジンはしゃがんで二人の目線に合わせると、懐から例の手配書を取り出して二人へ差し出した。ちなみにこの手配書はここへ連れてくる際、ドクターに頼んで新しい手配書をその辺の店先で貰ってきておいたものだ。

手配書を見た途端、二人は一瞬こちらと見比べたがすぐに違う存在であることを告げて話を元に戻した。

「えっと・・・コイツらこの辺じゃ少し有名な盗賊団だよ」

「そうそう。この間も隣町でひと暴れして、こんなに賞金が跳ね上がったっていう話だけど・・・」

「ホウ、ひと暴れとは？」

ジンの隣でドクターが同じようにしゃがんで話に割ってきた。まださっきの賞金額について不満がある様なのか機嫌が悪そうだ、いつもより顔の影の濃度が30%濃い。

「ヒィィ！！えっと・・・4日前に隣町の銀行の金庫荒らしたとか、何とか！！」

「そうそう！被害金額は5000万Lだって聞いてます！」

余程ドクターの睨みが怖いのか、二人は涙を流しながらまるでこれから殺されてしまう様に震え、無き顔で答えた。

「フ～ン・・・アジトがどこにあるとかは、知ってるか？」

「オ、オレは知りません！！」

「あたし聞いたことがあります！！この先にある「トロイカの洞窟」を根城にしてるって、不明瞭な噂なんですけど・・・」

「ああ、その場所オレ知ってます！！この街から西に5km離れたところにある岩場ですう！！」

トロイカの洞窟・・・ドクターに裏をとってもらうために地図を広げると、確かに西には広い岩場の道があるようだ。この地図には載ってないが、少し脅して話を細かく聞くと本当にその辺りには大きな洞窟があると言うらしい。確認してみるだけの価値はありそうだ。

知りたいことも知ったのでジンは二人をさっさと解放してやると、二人はその場から立ち上がり物凄い速さで悲鳴を上げながらどこかへ逃げてしまった。

「キシキシ・・・いいのかい？」

「別に問題ねえさ。知りたいことは全て解った・・・」

こうして全員は胸の奥底に怒りと殺意の炎を燃やしながら歩き始めた。

目指すはマテバ西部、トロイカの洞窟・・・もとい、「盗賊団シグ」。

カンカンの太陽に照りつけられて乾ききった岩の大地を歩き続けること30分、一同は目的位置であるトロイカの洞窟へたどり着くことができた。一行の目の前には大地に埋もれた巨岩があり、その一部分に人が入れそうなくらいの穴が空いていた。ジンの感覚では、洞窟と呼ぶより洞穴に近い物がある。

そこへ一歩踏み入れて耳を澄ませば、ずっと奥の方から数人の人間が騒いでいるのが聞こえた。虎眼の合図と共に、一行は穴の中へ侵入してゆく。

穴の中は盟絵と続く階段構造となっており、天然の岩肌にも人の手を加えられた跡がみられる。出来るだけ物音をたてないように地下へ進んでゆくと、次第に光が薄くなるにつれて空気も冷たくなってきた。

「ひえ～、なんか涼しくなってきたさ～」

「地下は一年を通して気温が一定に保たれている。地下をアジトに構えるとはなかなか感心するねえ」

「お前らちっと黙ってろ」

「おっと、失礼・・・キシキシ」

「・・・止まれ」

先頭を歩いていた虎眼が後続の4人に停止の合図を送った。階段の終わりが見えてきた先の角から、わずかな光と笑い声が聞こえてくる。代表してジンと虎眼がそっと近づいて顔を覗かせ確認をとると、そこには例の盗賊団シグのメンバーが5人全員いた。連中は話に合った先日強奪したと思われる金品を囲んで酒盛りの真っ最中だった。

「ギャハハハハハ！！オイ、次の買い出しは誰が行くのか決まったか？」

上座を陣取り、品の無い笑い声を上げているのが、例のジンに似た時具の頭領「ザウウェル」で間違い無い。正面ではドクター似のスナイプとアゲート似のハンドがジャンケンをしている。どうやら酒の肴が切れたから誰か買い出しに行かせるつもりらしい。盗んだ金で飯を食い酒をかつ食らうとは、何とも腐った根性の持ち主である。

「待ってな頭、次で決めませう」

「ギヒヒヒ・・・それじゃあ、じゃ～んけ～ん」

「「ポン！」」

「イエーイ！ハンドの負け確定だしー！」

「ギヒヒヒヒ・・・さっさと行って来い」

ジャンケンに負けたハンドが買い出しに担当されたせいで、目の前の金貨の山から金貨を一掴みポケットに仕舞うと渋々立ち上がって出口へ向かった。

ダラダラおもしろくなさそうに歩き、角を曲がった瞬間、鈍い音と共にハンドは金貨の山の中へ

とんぼ返りしてきた。驚いて一斉にハンドの元へ駆け寄ると、本人は鼻がつぶれて血を垂れ流し、完全に伸びてしまっていた。予期せぬ出来事に一瞬取り乱されたが、全員で一斉に出口へ視線を向けた。

「誰だそこに居やがるのは！！？出てきやがれ！！」

ザウウェルが腰を持ち上げて叫ぶと、洞窟中にしばらくの間反響する声が響いた。数秒静寂が続くと、入口の奥から硬い地面の上を歩く靴音が鳴り、ゆっくりと音が目の前まで現れた。その音の正体を目撃した途端、全員が目を見開いて驚愕した。現れたのはザウウェルと同じ顔をした見たことの無い男（ジン）だった。ジンは5人の目の前で仁王立ちするとメガネを少し持ち上げ、ワザとらしくニヤリと笑って見せた。

「テ、テメエ一体何者だ！！誰なんだ！？」

真っ先に動揺したのはもちろんザウウェル自身だ。何せ鏡に合わせた様な瓜二つの顔つきをした男が目の前に現れたのだから。ジンは何も言うことなく、右手を静かに前へ伸ばすと、挑発するように人差し指をクイックイッと数回折りたたみ、そのまま逃げるように階段を駆け上った。しばらく階段を上っている遠くから連中の雄叫びが聞こえてきた。うまく挑発に乗ってくれたようだった。ここまでは計画通り・・・これからが本番だ。

長い階段を駆け上り、強い日差しを浴びながら洞窟の外へ出ると、ザウウェル達はまたも自分の目を疑った。外にはザウウェルと同じ顔をしたジン以外に、他の仲間と同じ顔をした連中が揃い踏みで横一列に並んで出迎えてくれたからだ。これには思わず腰を抜かしかけた。

「フザケやがって・・・誰なんだテメエらはよう？まさかこのご時世にドッペルゲンガーとかいう訳じゃあるめえな？」

ザウウェルが自分の中に込み上げてきた恐怖を打ち消すように、わざと大きな声を張り上げて全員に問いかけた。

「・・・俺達はそんな大層な者じゃない」

「オレっち達は、旅人さ！」

「ただちょっとそのツラが気に食わねえから・・・」

「小生たちが狩りに来たのさ・・・キシシシシ」

「そういう事だ・・・満足か？」

5人は額に血管を浮かべ明らかにご立腹モード突入のまま、それぞれ武器を構え始めた。

「下らねえ答えだな・・・俺達が誰か解ってるのか？やっちまえ！！！」

恐怖から回復した強盗団も、さっき持ってきた自分専用の武器や凶器を取り出して、いよいよ派

手な喧嘩が始まってしまうのだった。

アゲートVSハンド

アゲートの大型戦斧、クレセントアックスに対しハンドが使用するのは大型のウォールハンマーだった。武器やバトルスタイルまでお互いに酷似していて二人は余計に腹立たしく思いながら、馬鹿力に任せて武器を振り回すのだった。

「おらクタバレや！！」

高い位置から降り下ろされたハンマーを斧の刀身を使って受け流すと、ハンマーは地面を砕いた。違う、砕いただけでは済まなかった。ハンマーの攻撃を真正面から受けた硬い地面は、まるでシーソーのように地盤がめくれ上がり陥没してしました。この様子を見て、アゲートはこのハンドのパワーが自分と同じかあるいはそれ以上であると見定め、気を引き締め直した。まともに食らえば確実に身体がバラバラに四散してしまう恐れがある。

「うっへ～、すげえパワーさ～！」

「伊達で体な鍛えてねえって話だよ、うおらあああ！！！」

今度は片腕でハンマーを横一文字になぎ払った。あの重量を片手で制御できるという事実に關している、その攻撃を今度は柄を使って受け止めようとした。しかしその圧倒的なパワーの前にその防御は心もとなさ過ぎたようで、アゲートは斧と共に遠方まで吹っ飛ばされてしまった。背中を岩肌で擦りながら地面を転がり、ようやくといった形で身体を持ち上げるともうポロポロだった。オマケに衝撃で腕が痺れて握力が低下していることを感じ取る。

「へえ・・・なかなかおもしろいっさ」

こんな状況でも、アゲートは余裕を見せて口元に笑顔を作っていた。唇をペロッと舐めると、前方からハンマーを両腕を使ってブン回しながらハンドが走ってきた。

「クタバレこの雑魚野郎！！」

最後のトドメの一発と言わんばかりに、全力を込めたハンマーが頭上へ襲いかかってきた。本来ならこの一撃で十分に「THE END」だっただろう。しかしアゲートだって仮にもラプチナで選ばれた最高ランクの戦士、こんな場面で幕を閉じる様な役者ではない。アゲートは膝を曲げると両脚全体に力をため込み、ハンマーの先端が頭部に直撃するよりも前に真上へ跳躍した。目標を失ったハンドとハンマーは勢いを殺せずそのまま大地にハンマーを陥没させてしまうのだった。

空を見上げると、頭上ではアゲートが太陽の光を浴びながら斧の刃を背中まで持ち上げて切り込む態勢に入っていた。このまま落下する勢いと馬鹿力の相乗効果を狙って振り下ろすつもりなのだ。そのアゲートの笑顔に危機感を覚えたハンドはハンマーを地面から引っこ抜くと、落下途

中のアゲートめがけて放り投げた。空中では会費もできないだろうと踏んだ、ハンドの苦肉の策だ。

しかし、それは無駄に等しい行為だと言う事に、この後すぐ思い知らされる。

「必っ殺！！バール・クラッシャー！！！」

今さら自分の技を名前にして叫ぶのはいかなものかと思うが、威力は絶大だった。アゲートの全体重、重力加速度、両腕の腕力、全てが上乘せされた斧は鋭い音を上げて振り下ろされた。刃先が目の前まで飛んできたハンマーに直撃すると、金属同士がぶつかり合う耳障りな金属音と共に、斧がハンマーをまるで大根の様に真っ二つに切断して見せた。そのままエネルギーを増幅させながら落下を続ける斧は、ハンドの鼻先をかすめて大地を割ってしまいそうな勢いで突き刺さった。

空中で分断されたハンマーが地面に落下するのとほぼ同じタイミングで、ハンドは泣きながら口から泡を吹き白目をむいて卒倒した。

「へへへ・・・結構強いかもしれないけど、まだまださ！」

斧を引き抜き片手でグルンッ！と振り回して肩に担ぐと、アゲートは汗を光らせながらキメ台詞で戦いを占めた。

ドクター vs スナイプ

こちらのスナイプも、ドクターと比較的似た様な戦い方をしていた。服の中に大量に隠し持った投げナイフを駆使し、手当たり次第にブン投げてドクターをかく乱させている。

「ギヒヒヒヒ・・・どうしたんだ白髪頭ぁ！？防戦一方じゃ勝てねえぞ！！」

スナイプの言う通り、ドクターは攻撃する様なそぶりは見せず、さっきから攻撃を避けてばかりだった。心境の全く読めないドクターは一声も笑うことなく、口を閉じて観察する様にスナイプの行動を見てばかりだ。

「・・・・・・・・」

「ギヒヒ・・・オラ喰らえ！！」

またもスナイプが持てるだけ持ったナイフを放り投げた。ドクターは今回も何の問題無く避けつつもりでいたが、このナイフの目標はドクター本人ではなかった。デコイのナイフが空中を通り過ぎていく最中、数本のナイフがドクターの黒衣の裾に刺さりそのまま地面に打ち付けられた。気が付いたころになって確認すれば、ドクターの黒衣にはすでに5本ものナイフが刺さりドクターはこれ以上身動きが取れない状況にまで陥っていた。

「キシシ・・・ちょっと甘く見たかな？」

「かかったなアホンダラが！！トドメじゃボケェ！！」

スナイプは皿に3本のナイフをドクターの周囲に突き刺すと、今度は急速に後退し出した。すぐ足元に刺さったナイフを見てみると、それは今まで投げてきたただのナイフではなく、柄に小さな筒がくくりつけてあった。筒には細い紐が繋がれており、その紐は火花を上げながら徐々に筒に向かいながら燃えている。

これはこのシーバルーで作られた兵器、「爆弾」だと言う事に気付くのはすぐだったが、この場から逃げようにも動くことができない。服を引き裂いているだけの時間もない。

そして・・・

ドオオオオオオオオン！！！！

爆弾は爆発し、周囲へ黒い煙と炎を撒き散らした。それを離れた安全な場所から見届けていたスナイプは、爆心地を望みながらゲラゲラと大笑いしている。

「ギヒヒヒヒヒヒ！！燃えろ、全部派手に燃え尽きちまえ、ギヒヒヒヒヒヒヒヒ！！！！」

「・・・・・・・・うるっさい」

ドヒュン！！

炎の中から風邪を切る様な鋭い発射音と共に何かが飛来し、それがスナイプの左肩へえぐりこんできた。何が起こったのかもわからず悲鳴を上げると、バランスを崩して尻もちをついて転んでしまった。傷口を見ると、それは今さっき自分が投げたナイフだった。

ザリ・・・ザリ・・・ザリ・・・

燃え盛る炎の奥で、人が歩いてくる音を耳にして爆心地へ眼を移した。瞬間、痛みで歪んでいた顔が驚愕した表情へ早変わりしてしまった。

足音の主はドクターだった。ドクターは炎の中から、炎を背にしてこちらへ向かいまっすぐ歩いてきている。その口元は、スナイプを遥かに上回る不気味さを携えた笑みが浮かんでおり、その背後には例によって魔神、ジャック・ザ・リッパーが付き添っている。

「キ～ッシッシッシッシッシッシッシッシッシッシッシ・・・」

「カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ」

ドクターの奇笑とジャックの無機質な笑いがコラボし、世にも奇妙な悪魔の二重奏を奏でながらズンズンと近づいてきた。

スナイプはその気味の悪さにビビりまくり、転んだまま身体を引きずって後ずさりしながら泣いた。

悲鳴を上げながらとっさにナイフを手にして投げたはいいが、ナイフはドクターに刺さるよりも早く空中でカキンッと情けない音を立てて弾かれた。

スナイプは知らなかったようだが、ドクターはある程度の魔術が使える。爆発する瞬間、ドクターは自分の周りが見えないくらい薄い氷の膜を張り、あの爆発を完全に無効化して難を逃れたのだ。

「ヒィィィィ！！な、何なんだお前は！？」

「・・・情けない。その上とてもつまらない。君がこの小生の真似をして生きていこうなんて4転生早い・・・キシシシシシシ」

「ちょっと待てくれ、マネってなんの話だ！？」

「うるさいと言わなかったかい？」

いよいよ面倒くさくなってきたドクターが反撃に出た。右腕をちょいっと持ち上げると、背後のジャックが瞬間スナイプの眼前まで接近した。そしてそのボロボロの奥から巨大なメスの形をしたナイフを交差させるように振り下ろすと、スナイプの身体に十字の傷が刻まれ血が噴出した。スナイプは恐怖と痛みが全身から込み上げ少し悲鳴を上げると、今度は地面にぶっ倒れて動かな

なくなってしまった。

「キシキシ・・・殺しはしない。傷は浅いからすぐに治療すれば簡単に助かるよ。何なら小生がここで治してやろうか？キ〜ッシッシッシッシッシッシッシッシ」

「カタカタカタカタカタカタカタ・・・」

ジェット vs ショット

こちらの戦いはジェットが苦戦している状況だった。もうしばらく時間がたっているのだが、肩で息をしているジェットに対しショットの方はまだ余裕の笑みを浮かべている。

「キャハハハハ！あんたマジでザコい系〜」

「ゼエ、ゼエ、余計な御世話だ厚化粧」

ジェットは汗をぬぐうと、挑発的な発言をしてやった。現にショットはジェットの言う通り若い女のくせに化粧が濃い。元の素顔の原型も解らなくなるほどファンデーションを重ねてその上からわけのわからない化粧品で派手に自分を着飾っている。本人はこれがイケていると思っているのだろうが、世間一般からしてみればケバケバの粧を優に超えているレベルなのだ。

「ザコい上にマジウザイ系だしあんた、あたいの魔法で逝っちゃいな！！」

痛に障ったショットはまたあのタクト型のステッキを振りかざした。瞬間地面が盛り上がったかと思えば、地面に埋まっていた岩や岩盤が空中に浮かびあがってきた。このショットという女、ジェットと同じ魔法を使う事の出来る女だったらしいのだ。魔力をステッキに集中させ一気に振り下ろすと、浮かんでいた岩がジェットへめがけ一直線に隕石の様に飛来して襲いかかった。ジェットは急いで杖に跨りサーフィンの様に跳んでくる岩と岩の隙間を捉えながら飛行し、例によって懐から取り出した携帯ステッキに魔力を注ぎ先端をショットへ向けた。回避しながら離れた場所への射撃は難しいが、不可能ではない。岩の隙間からわずかにショットの姿を捉えると、ステッキの先端から炎の弾丸が発射された。炎の鋼球はドリルの様に回転し、スピードを増しながらショットへ一直線に襲いかかろうとする。これが炎系の上級魔術、「キールロワイヤル」だ。

しかし、この攻撃はショットよりも先に遮る様に現れた岩に直撃、表面を数十cm削っただけで終わってしまった。

「キャハハハハ！！あたいの勝ち系で決定な感じだしー！！」

ジェットがもう一度攻撃に入る前に、ショットが先に攻撃を仕掛けた。ステッキにありったけの魔力を注ぎガムシャラに振りまわすと、周囲に転がっていたほとんどの大岩から小石が無数に空中へ持ち上げられた。ショットが考え編み出したオリジナル魔法、その名は「スターダスト」。文字通り、星屑の様に存在する無数の岩がジェットの周りを取り囲み、逃げ場を完全に遮断してしまったのではないか。これにはさすがのジェットも焦りを隠せずいた。

「イエエエエ！！ゲームオーバー、イヤッホー——！！！」

空がを前のめりになるほどステッキを振り下ろすと、全ての岩が高速でジェットへ襲いかかった

。逃げられないジェットは急いで表面に防御用の障壁を展開したが、それはまるでガラス板のように無情なほど簡単に砕かれてしまった。

ズドドドドドオオオオオン！！！！

悲鳴すら聞こえない、まるで爆発の様な轟音と地響きを引き起こし、全ての星がジェットへ命中した。

しばらくの間砂埃が舞い散り、視界が良くなってきたところで岩山の中を確認してみると・・・わずかな岩の隙間からジェットの腕だけが外へ顔を覗かせていた。もちろん、即死なのは言うまでもない。

「キャハハハハハハハ！！やっばあたいの魔法は世界最強系だしー！！」

勝利の美酒をがぶ飲みし、酔っぱらって悦にひたる様にショットは甲高い高笑いを辺り一面まで響き渡らせた。

パチンッ！

小さい筈なのに、ヤケに耳に響くような音が聞こえた。その音と共に笑いが止まると、音の正体を探るために周囲をグルグルと見回した。しかし見えるのは岩の残骸と砂ぐらいしかない。と思っていたそんな時である、ジェットの死体に異変が生じた。

ジェットのわずかに見えていた腕が淡く輝きだし、次第に肌が真っ赤な光に包まれたかと思ったら、直後その光は花火の様に空気中に飛び散り消えてしまった。

「なんな訳？マジわかんない系だし・・・マジキモイっつーの」

「キモくて悪かったなコラ！」

聞いたことのある声が今確かに聞こえた。しかもすぐそば、今ジェットの死体が消えたあの岩山の上からだ。見上げるとそこには、岩の上に腰かけて悪戯の成功した子供のようにケラケラと笑いながら困惑するショットを見下しているジェットがいた。

なぜここにジェットがいるのか、そして今死んだはずのジェットは何者なのか？答えは簡単。あの時ショットと戦っていたのはジェットの魔力で作り上げた分身、すなわち偽物だ。原理は魔神プロメテウスを作るのと同じ、放出した魔力を自分の姿ソックリに練り上げて後は離れた場所（この時本体は空の上）で遠隔操作をすればあっという間に操り人形の完成だ。限定された魔力の塊なので本体より圧倒的に弱い、ど素人の魔法使いの目を欺くぐらいは簡単だったようだ。

「けけけけ・・・まあ初めてやったにしちゃ上出来だが、やっぱ操作が難しいな。実戦には使
いづらい」

相手が魔法使いであることを知った時からすでに、ジェットはハナから真面目に戦う気なんてサラ
サラ無かった。前回は説明したが、魔法使いにできる魔法は物体を浮かべたり動かしたりするこ
とだけなのだ（5話参照）。そんな奴に本気で戦う事なんてせず、今回はジェットが思いついた
新しい魔術の実験をするために相手にしただけなのだ。結果、実戦での応用ならばプロメテウス
の方が簡単で強力であるという結論に達した訳である。

「マジ意味わかんない系だし！つうかあんた死ねよ！！」

相手に小馬鹿にされた怒りからもう一度魔法を発動させ、岩をジェットめがけて発射した。しか
しそこは一流の魔術師、こんな攻撃へでも無い。ジェットは杖を軽く振りまわすと、空中に浮か
んでいたすべての岩が炎に包まれ、瞬間蒸発して消えてしまった。

「・・・マジで？」

「さてと、こっから先はアタシの攻撃・・・だよなあ？」

岩から飛び降りると、ショットを見据えながら邪悪な笑みを浮かべた。全身から赤いオーラが放
出され、ジェットの背後にプロメテウスが出電する。

「その特殊メイク、今からはぎ取ってやるから覚悟しろやこのアバズレ女！！」

ジェットが杖を振りかざすと、プロメテウスが高速でショットの目の前まで迫ってきた。追い詰
められそうになったショットも走りながら岩を操作してプロメテウスを攻撃するが、全ての岩は
プロメテウスの炎を纏った二つの拳によって砕け散り、黒コゲにされて弾き飛ばされてしまっ
た。

魔法使いが魔術師に勝てるはずがない。これこそが一流と五流、魔術師と魔法使いの力の差だ
った。

「プロメテウスとガチンコで勝負するには、魔力も力量も足りねえ・・・くたばっとけ」

「オララララララララララララララララララ！！！」

プロメテウスが吼え、数えきれない数の拳が雨あられの如くショットの全身に降り注がれた。特
に顔面は重点的に攻め、表面の化粧は燃え上がり元の原型が消えて人間の顔が消えてしまうと、
遙か彼方まで吹っ飛ばされて気絶してしまった。

「おっといけねえや・・・もっと派手な特殊メイクになっちまった。悪い悪い」

虎眼 v s サブマシン

こちらは実況をするよりも早く勝敗が決していた。腕を組み仁王立ちしている虎眼に際し、サブマシンはすでに全身ボッコボコのフルボッコにブチのめされていた。

「・・・口ほどにもない。武器まで使わせてやったと言うのにこの程度か？」

「うう・・・ひどい」

「・・・ふう。まだ喋れるだけの元気があるなら、もう一発言っておくか？」

相手の答えを聞くよりも早く、虎眼は行動に出た。爪先を転がっているサブマシンの服に引っ掛けると、そのまま足を力強く振り上げてサブマシンをはるか上空まで放り投げた。徐々に遠ざかってゆくサブマシンの悲鳴を余所に、虎眼は首を回して骨をコキコキ鳴らしたり、足を延ばしたり折ったりして準備に取り掛かっている。

悲鳴がまた少しずつ近づいてきたのを耳で感じ取ると、右足を半歩後ろへ引いて準備が完了した。

そしてサブマシンが虎眼の頭上まで落ちてきた瞬間、ジェットのプロメテウスを上回るスピードとパワーで右足を振り抜いた。右足は正確にサブマシンの背中を捉えると、背中から全身へかけてメキメキと鈍い音を響かせと思ったら、また体が空の向こうまで吹き飛んでしまった。これは昔猫眼の思いつきで完成させた技、「翼竜脚」である。

「フウ・・・」

何のセリフの残さぬまま虎眼はその場を立ち去ったその数秒後、さっきまで虎眼が立っていた場所へまたサブマシンが墜落した。今度は受け止める物など何もない、身体は固い地面に追突し深くめり込んでしまった。この時まだサブマシンが生きていたのは、達人虎眼の微妙な力加減の賜物だと言う事で処理しておこう。

ジン v s ザウウエル

「どわあああああ！！」

ザウウエルの声が右から左へ通過すると、岩肌に背中から叩きつけられた。手には刃の分厚い青龍刀が握られている。ザウウエルもジンと同様に剣を使うタイプのようなのだが、唯一違ったのはザウウエルが一刀流だった事だった。

「ああん？この程度なのかよ、ダッセーな」

顔をしかめながら血を流して苦しそうにしているザウウエルを見下すのはジンだ。ジンは通常双剣を使って戦うのだが、この時は右手に一本しか剣は握られていない。本人曰く、「ハンデ」だそうだ。その行為が気に入らなくて飛び出したのはいいが、さっきからこんな感じで簡単に返り討ちにされっぱなしでいるのが現状だ。

「オイオイオイ、オレのモノマネするならもっと強くならなきゃだめだろうがよう？」

「モノマネしてんのはどっちだガキが・・・うおりゃああああ！！」

懲りることを知らず刀を構え直しザウウエルが再三襲いかかってきた。しかしそれがかつたような顔でヒラリと、ラク～にかわしてしまった。上から、右から、左から、下から、何度も何度も刀を振りまわすが決定的な一撃をたたきこむことができない。ザウウエル本人も剣の心得がある、決して素人と呼べる実力者ではないのだがこのジンに対して全くかすりもしないことに腹立たしさを感じてきている。その感情が刀に伝わり、次第に一直線で大雑把な太刀筋へ変わる。ここまで来てはもう実力者と呼べる振るい方ではない。ジンもいいかげん避けるのも飽きてきた。

「ああ～ダリい。もういいや」

ザウウエルには聞こえない小さな声でそうつぶやくと、さっきから随分と隙だらけだった顔面に足の底をたたきつけてやった。虚を突かれたザウウエルは情けなく転がると、鼻から多めの血が噴き出して匂いが解らなくなってきた。

「ハッキリ言うわ。もう面倒くせえから一撃で決める、いいな」

そう宣言すると、ほんのちょっとだけ頭に集中力を注ぎ今まで腰にぶら下がりっぱなしだったもう一本の剣を引き抜き、腰を低く構えた。本を読んで試したくなかったあの技を試すいい機会だ。

「フザケやがって・・・終わりなのはテメエだこの野郎！！」

口は達者だが、体はそれ以上に正直だった。出血は多くないが体中の傷と骨が痛み、立つことでさえ実を言うと精いっぱいなのだ。そんな状況でも刀を手放さず戦闘意欲をここまでむき出しにしている根性には、ジンも敬意を表す。

だからこそ、

スパンッ！

耳をわずかに刺激する涼やかな音が鼓膜をつついた。いつの間にかジンはザウウエルの目の前から姿を消し、背後に回って剣を振り抜いた姿勢で立っていた。一体何が起こったのかわからず、振り返る余裕もない。

「……？」

「……オープニング」

ジンは小さく呟きながら剣を一本鞘の中に仕舞った。カチンッ！と留め金が鳴ったとたん、ザウウエルの青龍刀の刀身がブツ切りの七等分に切り刻まれ、地面に散らばった。それだけでは終わらない。

「……エンディング」

もう一本の剣を仕舞い留め金でおさえられた直後、今度はザウウエルの着ている服がパンツ一枚を残してズタズタに切り裂かれ足元に散った。そう、その姿はここに来る途中船の中で読んだ漫画にあった主人公がやってのけた神業漫画斬りそのまんまである。もちろんザウウエルも漫画と同じ展開で、お約束のように卒倒して気絶した。

「……つまんねえもの斬っちゃった」

数時間後、身も心のボロボロにされた盗賊団シグは、5人の手によって町の交番に引き渡された。連中の首に掛けられていた賞金は話し合いの結果5人には要らない者とされ、代わりにある物を請求した。

その後一行は賞金の代わりに請求した、たくさんの水と食料の詰め込まれた長旅にも使える高性能の車を手にし、シーバラーの旅を始めていた。この屋根の無い武骨なデザインの車の名前は、ドクターの記憶では「ジープ」と覚えられている。運転席には虎眼が座ってハンドルを握り、助手席にはジンが座ってタバコをふかしていた。残りの3人は後部座席に仲良く座っている。

「なあジン、あの連中の賞金本当に要らなかったのさ？オレっちまでもったいないと思ってるんだけど」

「これ以上かさばる物は邪魔だ。ただでさえこれ以上荷物担ぐだけのスペースが無いんだ、我慢しろ」

ジンの言う通り、座席はゆったり目に作られていると言ってもこれ以上物は入らないし、車の荷台にはもう旅に必要な水と食料でパンパン、財布もまだ十二分に潤っているしドクターのトランクにだって限界がある。これ以上の過積載は望めないと言うのがドクターと虎眼双方の意見だったのでそれを採用した。

「ジン、これからどこへ向かえばいいんだ？」

「ああ、地図ではこの先に小さな村があるっぽい。このまままっすぐ進みんしゃい」

「キシシ・・・曖昧な助手だねえ」

なにはともあれ、そんな感じで人違い騒動は片付き、一行を乗せたジープは一路新たな場所へ向かって走り出すのだった。

シーバラーでの旅、一体これから何が待ち受けているのやら・・・。

続

後書き

このところ年舞う年始仕事が多くそ忙しくて作品が全く手に付かなかった
でも何とか完成させることができてうれしい
読んでくれてる皆さんありがとうございます
今後とも御読よろしくお願ひします

全員の冒険志願理由

- ・ アゲート

「賞金で家族皆の生活を少しでも楽にしたいさ！」

- ・ ジェット

「まだ未熟者だからな、世界を回ってもっと勉強してえ」

- ・ ファントム

「世界にはまだ未知の技術が存在しているに違いない、それらを全て学んで小生のものとしたい。キシキシキシ」

- ・ 虎眼

「世界を相手に戦えるんだろう？心身の鍛練にはもってこいだ」

- ・ ジン

「やりたくてこんな面倒くさいことするかっての！！家のクソオヤジに無理やり引きずられて連れてこられて、訳わかんねえうちにオーディションやらされたら偶然勝ち残っただけだ！俺の本意では決してねえ、文句あつか
コラ！？」